

平成25年度第1回墨田区図書館運営協議会会議録

1 日時 平成25年9月14日(日曜日)

午前10時~正午

2 場所 墨田区立ひきふね図書館 会議室

3 出席者

会 長	永田 治樹	(筑波大学名誉教授)
副 会 長	河西 由美子	(玉川大学准教授)
委 員	五十嵐 光春	(墨田区立小梅小学校長)
委 員	西村 均	(墨田区立竪川中学校長)
委 員	金子 キク子	(図書館ボランティア「くさぶえ」)
委 員	永井 敬子	(図書館ボランティア「おはなしポット」)
委 員	小田垣 宏和	(ひきふね図書館パートナーズ)
委 員	小柳 裕基	(公募区民委員)
委 員	荘司 美幸	(公募区民委員)

欠席者 小野内 常子(ひきふね図書館パートナーズ)

4 議事

(1) 平成24年度の実績報告

(2) 平成25年度の図書館サービスの現状について

5 会議録

議事第1

平成24年度の実績報告

永田会長 事務局に説明をお願いしたい。

(資料1のとおりひきふね図書館次長が説明する)

五十嵐委員 年齢別貸出者数の区分について、0歳から6歳は未就学児、7歳から12歳は小学生、13歳から15歳は中学生なのだと思う。では16歳から22歳というのはどういう区分か。

井東次長 高校生から大学生くらいまでである。

五十嵐委員 そう考えると、23歳から59歳は幅が広すぎるのではないか。この数字で何を示そうとしているのか。

井東次長 成人へのサービスと、児童へのサービスという線引きをしている。従来この考え方による統計を取っており、継続性も考慮し、現在まで同じ統計を取っているが、状況は把握している。23歳から上では、30代、40代の方の利用が多くなっている。それに対して、50代が続き、20代は極端に利用が少なくなっているのが傾向である。小学生の利用は多いが中学生の利用はどうしても下がってしまう。

五十嵐委員 把握しているのであれば、出してほしい。

永田会長 五十嵐委員のいうとおり、成人の年代別の数字は必要だと思う。傾向については、ヤングアダルトの世代の利用が落ちるとするのは一般的な傾向である。ただ、どれくらい落ち込んでいるかが問題である。人口構成と併せて見せてもらえると、どの層がよく利用しているかがわかる。墨田区は高齢者が多いが、その層は割りりと出足が少ないという数字が出てくると思う。そのところをどうするかというのも問題である。

小柳委員 前年の傾向との比較が無いので、今年の数値が良いのか悪いのかわからない。また、個人登録者数が区民の約3割ということだったが、利用者のうち約15%は区外在住の方ということなので、厳密にいうと、大体25%ほどの利用率となると思う。

井東次長 図書館指標を経年比較できる資料は、教育委員会が発行している教育概要に掲載されている。

小柳委員 大体の傾向がわかるようなものがあると、短時間で把握するにはよいのかと思う。

永田会長 教育概要をざっと見ると、先進国によくある傾向を示している。これには様々な原因が考えられる。図書館サービスが、現在では別の形で提供できるようになってきており、民間セクターでも行われるようになってきている。日本は割りりと落込みは小さいのだが、その中で墨田区の位置づけをしなければならないと考える。墨田区の登録率はだいたい日本の平均くらいである。日本は、世界の中では図書館登録率は低い。良い国だと6割くらいが登録している。そういう数字を出していると、図書館の行政における重要性が増す。至上課題として、登録率を上げる戦略が望まれる。日本でも良い図書館は40%、50%のところもある。そういうところはそれぞれ工夫をしている。いずれにしても、登録率が25%で貸出数が多いのは、ヘビーユーザーが多いということだ。一部の方がよく利用している。もっといろいろな人が図書館をうまく使ってもらえるようにするのが課題である。

議事第2

平成25年度の図書館サービスの現状について

永田会長 事務局に説明をお願いしたい。

(資料2のとおりひきふね図書館長が説明する)

河西委員 学校司書を置かないというのは、教育委員会としての姿勢か。

村田館長 図書館として、非常勤職員で対応している。

河西委員 学校司書の採用については、過去2年、国から150億円くらいの補助金が出ている。その中で、学校図書館法の改正も検討されており、状況によっては学校司書を配置していくことになるかもしれない。そうなったときにどうするか考えておかなければならないと思う。

永田会長 ブックスタートについてはどうか。

河西委員 ブックスタートについて説明をさせていただく。赤ちゃんの健診時にブックスタートキットと呼ばれるものを配って、図書館を通じて絵本を楽しむ文化を育てるという子育て支援策で、1990年代にイギリスで始まったものである。イギリスでは80,90%の自治体で行われている。日本では、2000年度の子ども読書年のときに準備研究会が発足され、今はNPOのブックスタートというところが、どのような絵本を配ったら良いかとか、どのようにボランティアを育てたら良いかななどのノウハウを提供している。赤ちゃんに絵本をというと、英才教育のようなものを想像される方がいるが、そうではなく、健診時に初対面のお母さん同士で会話もない中、ボランティアさんがマットレスなどをひいて、そこで絵本を出して赤ちゃんに見せたりする。そうすると赤ちゃんも和むし、お母さんも、経験豊かなボランティアの方に子育ての悩み相談ができるなど、福祉的な効果もある。これは図書館からするとアウトリーチ、今までは手が届かなかったところにこちらから出向き、参入していった、利用の可能性を広げるものである。利用者側からすれば、今まで知らない図書館の側面を知ることができる。日本ではまだ50%前後の自治体でしか行われていない。自治体の財政状況や、出生率による費用対効果での判断ということになるが、図書館が関わっての子育て支援をするという意識があるかということにもつながる。墨田区では、平成15年度からやっていて、交付率は90%を超えている。これがイギリスで始まったときは、本がたくさんある家庭とない家庭があり、そこを是正していくという意識があった。イギリスでは所得の低い地域であるほど図書館の貸出率が高い。自分で本を買えないので当然ではあるが、全ての家庭に文化的な素養をということで行われている。

永田会長 登録率のアップというのが墨田区立図書館の課題である。図書館の活動を広げていくための領域を設定していなければならない。子育て支援というのは社会的に大きな問題である。それに図書館が関わっているというのは大変有意義なことだと思う。スペインでは、ブックスタートのさらに前段階のサービスを行っている。妊娠中のお母さんに産科医が読む喜びを説くものである。お母さんにとっても生まれてくる子どもにとっても良いという。昨今、読書が人間の発達に重要な役割を果たすというのが一般的な認識になっているが、ブックスタートよりも前の段階もあ

ることは興味深い話である。それでは、委員の方にいろいろなボランティアの方がいるので、それぞれ活動状況をご紹介いただきたい。

小田垣委員 今年4月からひきふね図書館パートナーズとして活動している。ひきふね図書館2階のプロジェクトコーナーで、墨堤の桜の写真やジャズフェスティバルの写真の展示や映像の企画を行った。また、9月からビジネス教養講座というものをやっているが、その前段として、プロジェクトコーナーを利用してビジネス書のビブリオバトルを開催した。オープンスペースで他の来館者の方にもご覧いただいた。他にも、墨田区で活躍されている音楽家の方々による演奏会や、映画会などを行った。英語の多読講座もオープンスペースで行った。また、未就学児を対象としたぬいぐるみお泊まり会というものも行ったが、これは大変好評であった。ぬいぐるみを図書館に持ってきて、持ってきた子がぬいぐるみを寝かしつける。そうすると、夜中にぬいぐるみが起きだして本を読んだり調べものをしたり、ぬいぐるみ同士が読み聞かせをしていたりする。その様子を写真に撮って、ぬいぐるみと一緒にお子さんに返すという企画である。図書館に好感をもってもらえた企画だったと思う。あとは、図書館ではなかなかボランティア同士が交流できない、ものづくりを支援している団体とか、すみだ青空市ヤッチャバという、地域の野菜の生産者がやっているところと協力したり、中小企業診断士の団体とともにビジネス支援なども行っている。こういう活動により、図書館を使う人の裾野を広げていきたいと考えている。それに加え、中学生が集まって、おもてなし課という活動をやっている。彼らは自主的に企画して活動をしており、8月に、図書館を使った調べもの競争という企画を開催した。設問も含め自分たちで作って、その答えを、図書館の資料を使って調べるということを、中学生が自主的に企画してやっている。優秀な中学生が集まっている。そこで育った中学生が高校生になって、次の中学生を育てるといふ、世代間の教育にもつながると思う。パートナーズは、上は70代から下は大学生と、世代間の交流もある。これからも積極的に活動していきたい。本日欠席している小野内委員も、パートナーズとして、すみだトリビアかるたという、墨田区のいろんな名産などをカルタにして展示するという企画をやっている。個々が企画を持っていて、自分の特性や繋がりを生かしてやっている。

金子委員 ある新聞の記事に、墨田区の図書館が出ていて、20代から70代まで、会社員、主婦、学生などが図書館をより魅力的にする企画というテーマでやっているという記事があった。

小田垣委員 その記事がきっかけとなって、今日、パートナーズの全体会があるが、そこに中野区の図書館ボランティアの方がパートナーズの活動を見学したいということで見学に来る。せっかくだから、読書会もいっしょにやりましょうということで、大人が読む絵本の読書会を中野区のボランティアと一緒にやることになった。東京新聞の記者の方は、今後の図書館を考える会ということで、日比谷図書館の講

座のOBの方の集まりがあって、その関係で全体会に来ていた。いろんな関係を広げていけたらと思っている。

永田会長 図書館としてはどうか。

村田館長 企画をして、それを実施までしていただく。今まで経験があった方もいると思うが、公共の場で実施していくということはなかなかなく、そういった意味で課題もあったが、皆さん前向きにやっていただいて、今は割りとスムーズにできているという印象である。

永田会長 裾野を広げていくとあったが、参加しているのは、大体区内の方が。

小田垣委員 基本的には区内の方だが、区外の方も多少は来られている。

永田会長 さらに、くさぶえやおはなしポットという団体がありますので、それぞれ少しずつ活動の紹介をお願いしたい。

金子委員 くさぶえとしましては、図書館のイベントに参加しているということではなく、お話の会、つくしんぼという団体にくさぶえのメンバーもだいが入っており、一緒に参加している。企画はつくしんぼがやっている。緑図書館で毎月の第1木曜日に幼児子の読書会というのをやっている。ここでは、4か月くらいのお子さんを連れなお母さんも、上では就学前のお子さんも参加している。親子50人くらいを対象に紙芝居などをやっている。終わった後、図書館の方がイベントに関連する絵本がある場合は紹介する。毎月テーマを決めており、30冊から50冊くらい並べてあり、終わってから30分くらいは自由に使っていただく時間を用意している。早く来た親子は棚からその本を手に取り、私たちも一言二言声をかけて、始まる前に和やかな雰囲気を作るようにしている。4か月くらいの赤ちゃんが、1年2年たって成長していくのを見ると、こちらもうれしく感じる。それとは別に、くさぶえとしては、銭湯に年3、4回出前朗読として、地域に関する朗読をしている。

永田会長 銭湯での出前朗読というのは、どのようなものなのか。

金子委員 銭湯が始まる前の40分くらい、その銭湯を利用している、主にお母さん方だが、墨田区に関連する本などを読み、最後は歌を歌って終わる。墨田区は、地域フォーラムというのがあって、今までは先生を呼んでお話をさせていただいて、質疑応答をしていたのだが、七分化会というので、その中に銭湯で繋がる地域の輪というのがあり、図書館を退職した方で、地域に大変詳しい方が、この銭湯について江戸時代のスライドなどを出し、図書館の利用を促している。こういうことも文化のうちだと説明してくれる。前に永田会長が、図書館の建物があるだけではだめだとおっしゃった。そういう小さな積み重ねも必要だと思う。

永井委員 おはなしポットは主に図書館、児童館での読み聞かせを行っているが、図書館に来る子本好きの子が多い。そういう子たちももちろん大事にしたいが、図書館に来ない子に来てほしいということで、小学校の朝の読み聞かせを行っている学校にお手伝いに行ったりしている。私たち自身は2、3校で協力をしているが、小

学校でボランティアが集まれば、全校でやったほうが良いと思うし、続けていると、授業の聞き方が違って来たという感想をいただく。そういうお手伝いをこれからもしていきたい。ボランティアの方も、自分の子どもには読んだことはあるけれど、30人に対して読むというのは不安だという方も少なくないので、そういう方を対象に勉強会などをしたり、相談にのったりするというのが、私たちがやっていることである。メンバーも高齢化が進んでいるが、お子さんが学校を卒業した後も親御さんが地域のために活動してくださる方もいる。いろんな場所でそういうグループが増えてくれれば、1人でも多くの子どもたちに接する機会が出てくるのではないかと思う。実際には、保育園でも図書館にそういうボランティアがいないかという話があると、私たちにも声がかかる。やり方などを一緒に考える場があれば良いと思う。

金子委員 先ほどは緑図書館での話をしたが、ひきふね図書館でもやらせていただいている。ひきふね図書館では、今までと違って舞台を寄贈していただいたボランティアサークルもある。舞台でやるのは、やるほうもやりやすいし、子どもの目線もちょうどよい位置にある。ひきふね図書館の場合はこどもとよしのコーナーで、八広図書館の場合は、職員の方が座布団を敷いてくれて、各館で特別の雰囲気を出してもらっている。八広図書館の場合は、終わった後、簡単な工作会があり、それを楽しみにしてきた子どもがお話とか本に興味を持ってもらえている。

永田会長 図書館ではボランティアの協力は非常に重要である。図書館も行政なので、縦割りという特徴がある。でも、住民はそういうのは関係ないので、自分たちに必要なことを展開して、図書館あるいは生涯学習センターとかを横断的につないでやっている場合もある。図書館は住民ニーズにそった行政になってもらいたい。また、学校との連携もある。10年くらい前に、ある自治体で、それは学校教育で、私たちは社会教育だから関係ないというようなことを言われたことがある。でも、今は学校と図書館が連携するということが一般的になってきている。今墨田区の学校図書館支援は図書館が学校に行き打ち合わせて、図書館のサービスを児童生徒に教えるという形をとっているのか。学校側の相手は誰になるのか。

南部主査 図書館の非常勤職員で担当する学校を決め、学校側では、学校図書館を担当される先生がいるので、その方と打合せをしている。原則として、週に1度、半日うちがっている。それぞれ学校の事情もあり、また、平日昼間は先生も忙しいので、十分な打合せができないこともあるが、図書館としてはその職員が行って、ボランティアに指導をしたり、委員会の活動時に子どもたちに指導をしたり、図書の整理等も要望に合わせて行っているが、いくつかのメニューを用意させていただいた上でどのようなメニューで学校図書館を良くしていくかという視点から話し合いをさせていただいている。それは学校によって全く違うものとなっている。

永田会長 小学校では、図書館との連携はどのように考えているか。

五十嵐委員 図書館の方が来られて、指導をしていただいているが、図書館とオンラインでつながっているパソコンが入っているので、図書館の資料の貸出等もしている。学校としては、直接図書館の方や、金子委員のようなボランティアの方に学校に来ていただいて、教員と保護者40名ほどを相手に読み聞かせ等をしていただいている。そのように個別にお願いをするというケースも多い。また、先ほどお話があったように、調べる学習のように、教員で指導ができないときは、図書館と指導室がうまく連携してやってもらえているので、調べる学習なども非常にスムーズに行えている。どちらかという、図書館から何かをしてくれというよりも、学校現場から読み聞かせ等をお願いするとか、図書館の方に来ていただきたいという形のほうがスムーズにニーズにあった対応をしていただけるのではないかなと思う。

永田会長 図書館側としてはどうか。

南部主査 学校側にもそれぞれ要望があるかと思うので、図書館としても同じ考えである。図書館で培ってきた図書館の職員のノウハウを学校図書館で生かさせていただいている。

永田会長 学校図書館自体に対しても何かやっているのか。

南部主査 基本的には学校図書館の本の配架、装備、修理の仕方等を中心にアドバイスをさせていただいている。場合によっては、ブックトークや団体貸出の依頼がある。図書館としてはできるだけ様々なメニューをご用意させていただきたいと思っているが、時間的な制約もあり、1校につき週に半日程度というのが今の限界である。

河西委員 非常勤職員の方は、司書等の資格を有しているのか。

南部主査 全員が持っているわけではない。

河西委員 統一したトレーニングはしているのか。

南部主査 できるだけ館内整理日等に事前研修などを行っているが、各人の能力によることが大きい。

河西委員 それが今大きな課題となっている。私は被災地支援等で東北にも行っているが、学校司書の採用で政府からお金が出るので採用しようと思っても、有資格者が地域にいないという問題が起きている。そうすると、公共図書館の担当者が研修・養成を全部やらなくてはいけなくて、手が回らなくてどうしたらよいかという相談をよく受ける。

村田館長 図書館の非常勤職員は長いので、経験で補っているという状況である。

小田垣委員 司書資格というのは、国家資格としての司書資格か。

河西委員 児童分野の図書館専門の司書というのは無いが、公共図書館の司書としては、司書資格があり、教員免許を持っている方は学校図書館司書教諭という、別の資格を取ることができる。それは学校の中で、普通の先生と兼任するタイプの資格である。教員免許を取っていれば、司書教諭の免許は5科目10単位を取ればよい

が、司書科目は24単位くらい必要である。通信教育でも1,2年かかる。

小柳委員 図書館の利用者が気楽に資格を取って、ボランティアになって司書業務のようなことを行うというのは難しいのか。

河西委員 私は通信教育も担当しているが、その中には、ボランティアをやっているが、もっと図書館のことを知りたくて資格を取るという方も多い。年齢も70代くらいの方までいる。割と司書資格というのは簡単に取れるものだと考えられる。

小柳委員 今後図書館の利用者の中からそのような方が出てきたりすると広がる可能性があると思う。

河西委員 今資格を持った方がいないという状況を考えると、本当はその資格と無資格の間にもう一つ何かあると良いと思う。ボランティアの方が何単位かとなれば、基本的なことはわかるので、とりあえず図書館のお手伝いをする第一歩が踏み出せるというようなものを、自治体独自でもあってもよいのかなと思う。

南部主査 図書館としても、ボランティアの活動なしには学校図書館も成り立たないと思っている。これからもボランティアに対しての講座とかを開いたり、ボランティアの育成に力を入れていきたいと考えている。先日、絵本の読み聞かせ講座を学校図書館ボランティアを対象に行ったところ、これが好評で、30名定員で、両日とも満席であった。ニーズはあると考えている。今後もこういったことをやっていきたい。

河西委員 私も研修講師をやっているので、お手伝いができると思う。声をかけていただきたい。

永田会長 小学校を出て中学、高校に行くと図書館に行かなくなる。

西村委員 中学生の一日を考えると、ほとんどの子は、学校が終わると部活をやって、その後帰ってすぐ塾に行く。土日も部活があったりすると、図書館に行く時間が無い。なので、学校図書室を利用させるのが手っ取り早い。この貸出冊数には図書館での数しか入っていないと思う。今は図書館と学校図書室はオンラインでつながっていて、学校でどれだけ借りられているかという数字がわかると思う。この数字もこの統計にいれて、経年変化を見られれば良いと思う。また、墨田区の教育委員会にも図書館アドバイザーとして、管理職のOBが3人いらっしゃる。去年、調べる学習をする際にどうしたらよいかわからなかったときに、アドバイザーに10回以上来てもらって、指導してもらった。指導室と図書館の連携が図れるとよいと思う。こういった指導が受けられるということは、国語部会でも図書館部会でも話をしている。ただ、調べる学習は社会の分野でも理科の分野でもありますので、全体に広がっていくとよい。小学生や未就学児童に対して読み聞かせが有効であるという話であるが、先日、中学校の図書館部で研究会を開いたときに、ポップを作らせるとよいのではないかという話も出た。その後には私から、中学生に対しても読み聞かせは有効である、特に生活指導困難校ほど読み聞かせが有効である。一部の国語の教

育団体のなかで、国語の授業の時間のうち5分から10分間くらい、教師が朗読をすることで、集中力が高まるので、座りなさいとか注意するよりも、本を読んでいたほうがよいという成果が実際に出ている。それも紹介をして、最後まで読みきるのではなく、授業ごとに読んでいく。そういったものもあるので、ぜひ取り入れてくださいという話はしている。そうやって、本への興味を高めていくことが今後中学生の貸出数を伸ばすことにつながると思っている。ただ、私の学校は言語能力推進校として都の指定を受けており、その中で読書活動の重視というのがある。この前、都全体の報告会の中で、読書活動にすごく力を入れている学校があった。その学校の先生の最終的な報告は、読書数が増えたことによって、学力も同じように上がっている、これはぜひ周知するべきという話もあった。

永田会長 そういう統計データはいくつもあって、例えばフィンランドは学力が高いが、図書館の利用数が全然違う。利用数を増やすにはどうするべきか。

小柳委員 民間では色々な手が考えられるが、民間の考え方だと、これだけデータベースがあるのだから、メールマガジンを送るなどが考えられる。行かないと情報がつかめないし、自分で検索するのは億劫なところがあるので、見る機会が増えれば、それをきっかけに利用者が増えるのではないかと。利用者登録数を現実に増やすことについては、2倍とかというのは難しいが、10%、15%くらいなら可能かもしれない。登録する方は何かのきっかけがあって登録していると思う。利用回数や利用価値を高めるという意味では、メールマガジン等を利用する。それが図書館でできるかという問題は残るが、一つの手段ではある。今、携帯電話の普及率は1人1台以上である。手間はメールマガジンの作成くらいで、下手にチラシを作るとかよりは一斉送信で済む。コストは若干かかるかもしれないが、トータルで考えるとそんなにお金がかからないかと思う。

永田会長 アメリカの公共図書館では、どこに住んでいる人がどの図書館をどう使っているかというビッグデータを分析している。そうすると、誰が使っていて誰が使っていないかがわかってくる。その場合、どういうグループをターゲットにしたらよいかが見えてくる。それに基づいて、次は何をするかという戦略を立てている。そこまで行かないまでも、先ほど年齢層のところを明らかにして、どのあたりにどの年齢層が多くて、どの層をターゲットとして掲げるかを検討していただきたい。どういうターゲットを絞って図書館サービスを展開していくかである。もう一つは、日本の図書館は新しいメディアのサービスができていない。近々電子書籍が入ってくる。電子書籍は高齢者には好評である。拡大もできるし、歩かなくてもよい。高齢者は割りと電子書籍を使っているというデータもある。新しいメディアを入れると、高齢者だけではなく、普通の人でも使うようになる。裾野を広げていくことが肝心であると、今日の数字を見ると思う。

河西委員 資料で、ボランティア育成活動の中に、高齢者サービス協力者養成講習会

は日数も受講者数も無いが、これは成立しなかったということか。

井東次長 これは、高齢者施設に出かけて行って、サービスをやっていただく人を養成する講座である。昨年を行うことができなかった。前の年はやっている。

河西委員 私は司書の資格の講座で、「児童サービス論」という科目を担当して教えているが、大人と違って発達に合わせた読書指導のポイントとか、読み聞かせの他にブックトークとかアニメーションとか、色々なアプローチがある。そういうことを教えるのだが、ここ10年教えていて思うのは、「児童サービス論」があるのなら、なぜ高齢者サービスの科目がないのかと思っている。これから司書のカリキュラムを考える上では、今後絶対入ってなくてはならない科目である。今まではシニアの方がボランティアをされているが、シニアを対象としたシニアのボランティアのニーズがものすごくある。もちろん若い人がシニア向けのボランティアをやってもよいが、なかなか実感としてシニアの実態が若い人は勉強しないとわからない。だから、手始めとしては、アクティブなシニアの方が他のシニアの方々にボランティアやサービスをする発想があってもよいと思う。

金子委員 それに関連して、地区内に特養老人ホームが7箇所くらいあるが、そちらに図書館が主催して私もうかがっているが、やはり特養老人ホームだから年配の方が多。楽しいものもよいが、私が和翔苑に行ったときに、古文を読んでほしいという方がいた。そこで、奥の細道の出発のところがこの地に関係しているということもあるので、奥の細道の出発のところを少し読んで差し上げたことがあるが、とても喜ばれた。図書館も一生懸命特養ホームに出張サービスをやっています。そこに本を持って行って、貸出しをしている。そういうところに入っている方の楽しみということも図書館では配慮をしている。私も元気をいただいている。

河西委員 それ以外にも、自宅にいらっしゃる層もものすごくある。その方のほとんどは図書館を使っていないと思う。そのあたりが今後のターゲットになるのではないか。

永井委員 サロンという形で、地域で高齢の方が集まって、体を動かしたりしているグループがある。そういうところからでも少しずつできればよいのではないか。

村田館長 本当にそういうことができれば一番よいと思う。ただ、限られた職員の数の中で広げていくことが難しい。今後はやり方を変えていかなければいけないと思っている。墨田区のガバナンスの考え方で、ボランティアさんにやっていただけたところはボランティアさんにやっていただくというのが理想だと考えている。

永井委員 私たちのグループのメンバーも、そういうところでは、同い年くらいの方を相手にするが、逆に自分がこうしてお役に立ててうれしいということで積極的に参加してくださる方がたくさんいて、これからはたくさん出てくると思う。ただ、どなたかがコーディネートをしてメンバーを募集するということまではやってあげる必要がある。

村田館長 行政の役割はコーディネートだと思う。そこをうまく機能させることができれば、もっとうまくサービスを行うことができるようになる。

荘司委員 今まで聞いていて、目的は何かと思い返して、登録者数とか貸出者数がどうしたら増えるかということが課題だったと思うが、先ほど河西委員がおっしゃったように、ブックスタートのようなアウトリーチを行うことで目標に近づくことができるのではないかと思っている。これからは、お年寄りの行くところ、例えば病院だったら、待合の時間もある。先ほど西村委員もおっしゃっていたが、学校図書館もあるので、そういうところの生かし方をもう少し柔軟に考えていくとよいと思う。

永田会長 数字は単純な資料なので、それにこだわるわけではない。地域社会をどうやって作っていくかという話である。もう一つのポイントは、自立した社会作りである。それができるとお互いに幸せである。先ほど河西委員もおっしゃっていたとおり、シニアをケアできるシニアを作っていくという、そのケアを受けたシニアが、自分が今度はケアする側になるというような連鎖ができるとよいと思う。それにしても、図書館としては、コーディネートとかサービスの展開の工夫が必要である。コーディネートでは、コレクションよりコネクションという言葉がある。コレクションはお金が無いとできないが、コーディネートにはコネクションが重要であるということである。それと、コレクションについても利用者にあったコレクションを考えると、やはりこれまでのメディアだけで勝負するというのは難しいと思う。子どもたちは携帯小説を読んでいるかもしれないし、今は手軽に電子書籍を読めるので、そういったところも視野に入れるとよい。先ほど、小柳委員から、メールでアナウンスするという意見があったが、例えば、登録するときに、メールでのアナウンスの許可をもらって、図書館の混雑状態等をお知らせするというのも手である。

河西委員 シンガポールの図書館は外壁にツイッターとかフェイスブックのバーコードが掲示してある。本人がそれを使って開くという形である。次からはメールマガジンが送られるようになる。

永田会長 図書館はSNSはやっているのか。

井東次長 システム的には可能であるが、ソフト面で課題がある。管理の面も不安がある。

永田会長 震災後、役所もSNSが解禁になった。地域の人やボランティアが見てくれれば、おかしな書き込みがあったら消していく。

小田垣委員 パートナーズでメールマガジンとフェイスブックページは作っている。

金子委員 ひきふね図書館の駐輪場はあまり良くないと聞く。他店舗の前に図書館来館者の自転車が置いてあるようである。駐輪場も上のラックにあげるのが大変という話もある。ぜひ考えてもらいたい。また、ひきふね図書館の看板について、曳舟駅の方からはよく見えるが、場所によっては見えない。ひきふね図書館の所在がわ

からない方もいると思う。わかりやすい表示が必要だと思う。

小柳委員 あと2,3年すれば認知されてくると思う。緑図書館も最初は場所がわかりづらかったが、今では皆さんわかっている。

井東次長 区のほうで色々な看板を設置しているが、それを直すタイミングで、図書館を入れてもらうことで対応したい。

永田会長 昨年度の報告もいただいたし、委員の皆さんの活動も確認させていただいた。これを今後どのようにしていくかについては、引き続き皆さんと図書館と一緒に考えていきたいと思う。本日の議事は全て終了した。これで、平成25年度第1回墨田区図書館運営協議会を閉会する。